発達理論の学び舎

Back Number: Vol 192

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

目次

3821. 春の予感：死を暗示させる夢

3822. 如来性

3823. 標準化された自己効力感

3824. こしらえられた英雄像：生と死の搾取

3825. 自我の言語記述活動と自己保存欲求

3826. 創造という実践道

3827. 一日の始まりに

3828. 高度に発達してしまうことへの恐れを超越したことを示唆する夢

3829. 春の予感を感じながら

3830. 暖かな午後より

3831. 新たな環境への適応課題について

3832. 今朝方の夢

3833. 晴れ渡る早朝の朝

3834. この夏からの選択肢

3835. 場所との縁とパリ小旅行計画

3836. 感謝と喜びの中で一心不乱に勉強する夢

3837. キャリアコンサルタントのテキストの再読と今朝方の夢の続き

3838. 経験と学び：可能性が開かれることへの恐れ

3839. 矛盾を抱える人間：存在に関する二種類の不安

3840. 芸術の社会的な意義

© YOHEI KATO 2019

3821. 春の予感：死を暗示させる夢

時刻は午前七時を迎えた。今日も嬉しいことに、起床直後に小鳥の鳴き声が聞こえた。

真冬の時代には、起床直後に小鳥の鳴き声を聞くことはできず、静寂さに包まれた闇の世界しかなかった。確かに今もまだ外は暗いのだが、視覚的な暗さに光を与えるかのように、小鳥たちの鳴き声がそこにある。もしかすると、音は光になれるのかもしれない。それは内側を明るく照らす光になれるのだ。

今もまだ小鳥たちが小さく鳴いている。

昨日の日記で書き留めたように、今週一週間は雨マークがなく、気温も暖かい。とりわけ、雨が一週間を通じて降らないというのは、いつ以来のことだろうか。下手をすると、昨年の夏の時期にそうした一週間があったぐらいだろうか。晴れの日が続くというのはそれぐらいに珍しいことだ。少しずつ春の到来を感じており、それが今から待ち遠しい。

計画通りに、三月のどこかでパリを訪れ、国立ピカソ美術館に足を運びたい。また、パリの街にある楽譜専門店を巡ることにする。

フローニンゲンからパリへはそれほど遠くないので、パリへの足取りはとても軽い。以前はパリに行く前にベルギーのアントワープを訪れ、帰りにブリュッセルに訪れようと思っていたが、今回は仕事の都合上、それは難しいかもしれない。どちらか片方の都市に訪れるぐらいに留めるか、どちらの都市もまた次回にするかもしれない。とにかく今回の旅の目的は、パリにある国立ピカソ美術館と、ドビュッシー記念館とラヴェル博物館に行くことであるから、それを最優先にしたい。

先ほど、今朝方の夢について振り返っていたが、あの夢の前後にはまだ別の夢があったように覚えている。だが、それらの記憶はもはやどこかに行ってしまったようだ。ただし、あの夢について再度思い出してみたとき、もう少し覚えている事柄がある。一つは、以前働いていた塾の同僚の女性と全く同じ名字の若く小さな男性があの場にいたことである。また、その彼と私は仲が良かったようであり、お互いに気さくに話し合っていたのを覚えている。彼と話をしているときに、もう二人別の男性が私たちの話に入ってきた。

二人とも同じ塾で働いている人であった。二人のうちの一人の方は、見た目がとても若く、私はてっきり自分と同じぐらいの年だと思っていた。すると、その方はなんと44歳だという。私が想像していた年齢よりも10歳から15歳ほど上であり、それを聞いた時には驚いた。その方の話を聞きながら、彼の年齢が二つの「4」という数字で構成されていることに関心を持った。4という数字は、死を暗示させるようなものであり、日本の社会では不吉なものだと見なされているかもしれない。だが私は、そうした不吉さよりも、幾分異常な好奇心を持って、44という数字とその人について色々と考えていた。

その場で話されていることに相槌を打ちながらも、私は44という数字とその男性の特性について考えを巡らせていた。すると、先ほどまで一対一で話をしていた若い男性が、私が以前とんでもない剣幕でその44歳の男性に罵りの言葉を浴びせたことがあると述べ、「いや〜、あの時は本当に驚きましたよ」とつぶやいた。私は身に覚えのないことだったので、「そのようなことありましたっけ？」と述べると、どうやらそれは本当にあった出来事のようであり、しばらくその件に関する話となった。そのような場面があったことを覚えている。

ここ最近、人間の死に対する関心が高まってきており、それが夢の中にも現れ始めたようだ。いやむしろ逆に、すでに無意識の中ではそうした関心が高まっていたがゆえに、顕在意識下の私は、死に関する探究を行い始めたと言えるかもしれない。いずれにせよ、死という現象を探究するプロセスが始まったことは確かなようだ。人は内面が変容すれば関心が変わり、新たな課題と探究項目に直面することになるというのは本当のようだ。フローニンゲン：2019/2/13（水）07:31

No.1676: Coming Spring

I notice that spiring will come soon. The weather has recently been wonderful, which makes me feel coming spiring. Today is fine, too. Groningen, 12:00, Thursday, 2/14/2019

3822. 如来性

時刻は午前九時を回った。先ほど、早朝の作曲実践を終え、そろそろ一杯目のコーヒーを飲みながら、今日の探究活動に入っていきたい。

今日はまず最初に、アーネスト・ベッカーの“The Birth and Death of Meaning: An Interdisciplinary Perspective on the Problem of Man (1971)”を読み進めていく。中身を改めて確認すると、本書はま

だ未読のようであり、先ほど目次を確認して、どの章を読むのかを決めた。13章のうち、3つの章が自分の関心に合致するものであり、それらの章を今日中に読み進めていこうと思う。

ここ最近は、死という現象に対する関心が膨らみ、それを文化人類学や社会学、そして心理学の観点から探究することを始め出した。当然、このテーマは今後一生涯を通じて探究していくものになるだろうという予感があり、決して無理をして探究を進めてはならない。そもそも、今の私が死を扱うというのはあまりにも早すぎるように思えてくる。だが、死への関心が芽生えたことにもきっと何かの意味があるはずであり、その意味を見出すためにも、このテーマの探究を進めていく。おそらく、その意味は突然目の前にやってくるだろう。

発見、経験、発達、それらには一つの共通した性質がある。それは「如来性」である。

発見、経験、発達はまさに、やって来るが如しなのだ。それらは抗いようもなく、突然向こうからやって来る。私たちにできることは、やって来たそれらに気づき、それらを受け入れることなのだ。そのようなことを思う。

先ほど作曲実践をしていた時、死にまつわる種々の感情は、太古の時代より何ら変わりのないものなのかもしれないということを思った。曲によってそのような感覚が喚起されたのである。そしてそこからふと、昨日読んでいたオットー・ランクの書籍で書かれていた記述について考えを巡らせていた。ランク曰く、真の芸術家は、不死を暗示させる時代の支配的なイデオロギーに屈しようとしないという特質を持つ。ただし、集合的なイデオロギーではなく、自らが生み出す創造物を通じて、個人の不死を実現させようとする欲求がある、ということをランクは述べていた。この指摘に対しては、自分が日々日記を綴り、作曲を行っている背景にあるものを考えると、納得できる部分が少なからずある。

創造行為というのは、おそらく時代に迎合するようなものでは決してなく、時代に抗う形で時代を変容させていく行為なのかもしれない。そしてそれは、時代が巧妙に作り上げた幻の不死を追いかけることに抗い、自らの創造行為を通じて、自らの固有性が顕現した創造物を永遠なものにしようとする営みなのかもしれない。

© YOHEI KATO 2019

雑多な考えが次から次に浮かんでくる。それらの考えを育んでいくというよりも、今は思い浮かんだ考えをつぶさに書き留めておくことを優先させたい。自らの考えを深めていくのは、書き出すというプロセスを通じて、つまり書きながら考えていくというのが最も望ましいように思える。とにかく書き、書き出し続けることを続けていく中で、思考が深まる如来性を待つのである。

それはいつか必ずやって来る。発見、経験、発達は、全て向こうからやって来るものなのだ。そして、時間も、人との出会いも、場所との出会いも、全ては向こうやらやって来るものだったのだ。フローニンゲン：2019/2/13（水）09:33

No.1677: A Song of the Setting Sun

Today has been sunny all day long. I'm seeing the beautiful setting sun now. I wish tomorrow will be as wonderful as today. Groningen, 17:24, Thursday, 2/14/2019

3823. 標準化された自己効力感

時刻は午前11時を迎えた。今日は雨は降らないが、一日を通して曇りがちの日になるようだ。

先ほどまでベッカーの書籍を読み進めており、特に関心を引いた三つの章を全て読み終えた。午後からは、その他の章についてもざっと目を通しておこうと思う。

これから休憩がてら、一曲ほど曲を作りたい。外の世界には、相変わらず小鳥の鳴き声がこだましており、心が安らぐ。

私は欧州の三年間の生活を通じて、絶えず何かしらの発達課題と向き合いながらも、不要なストレスは一切ない生活を送っている。心身の状態を大きく崩す根元の最たるものとして、不要なストレスが挙げられることを今朝方も考えていた。

先ほどの日記で書き留めた「如来性」というのは、人間の死についても当てはまるだろう。死は来るが如しなのだ。だが、現代人は死を大いに忌避しながらも、自ら率先して死に向かっていこうとする。不必要かつ大量のストレスを得ることが常態化してしまっている現代人を見ると、そのようなことを思う。そうした不要かつ大量のストレスを感じさせてしまう現代社会はどこかおかしく、それに気づくこと

ができない現代人にもおかしさが潜んでいると言えるだろう。現代社会の文化と仕組みは、来るが如しの形で死を体験させることを現代人に許さない点で、非常に非人道的だ。また、そうした巧妙な文化と仕組みに気づくことができず、ストレスに晒され続けてしまっている現代人はもはや人間とは呼べない存在に成り下がってしまっているのではないか。

昼食前に一曲作る前に、もう少し文章を書き留めておきたい。ベッカーの書籍を読んでいる最中に、非常に洞察溢れる指摘を見つけた。それは、この現代社会においては、自己効力感すらもが標準化されているというものだ。確かにベッカーは、自己効力感を感じることの重要性を指摘している。私もその点に同意する。だが、ベッカーが指摘しているように、仮に自己効力感というものが、この現代社会によってこしらえられたものであり、なおかつそれが標準化されたものである場合、自己効力感を得ることを促すことは実に安易なのではないかと思わされる。

一昨年、昨年と、発達科学の研究に従事する際には、随分と統計学的な手法を活用した。また、複雑性科学の一領域である非線形ダイナミクスの手法を活用して研究を進めていた。それらの手法には、たいていデータを標準化させるプロセスが組み込まれていた。確かにそれをしなければ見えてこない発見事項があることは確かだが、私は標準化の手順を踏むときには、いつも何か重要なことが喪失されてしまっているのではないかと感じていた。一つのデータには、標準化されえぬ意味が含まれているのだ。

しかもその意味は階層構造を本来持っており、標準化されてしまうことによって、文字通り、単一的な意味に成り果ててしまう。上述のベッカーの指摘と合わせて考えると、確かに標準化によって物事が扱いやすくなる側面もあることは確かだが、その代償として、階層的な尊い意味を喪失してしまうことを忘れてはならない。

何よりも、自己効力感を標準化し、それを高めることを促す現代社会は、人間存在というものを極めて矮小化しているのだ。ここにも現代社会の愚行を見て取ることでき、そうした標準化された自己効力感を懸命に高めようとする現代人の愚行も見て取ることができる。フローニンゲン：2019/2/13（水）11:09

3824. こしらえられた英雄像：生と死の搾取

窓の外に見える裸の街路樹が風に揺られている。その揺れを眺めながら、まだとりとめもないことを考えている。私たちは誰しも、固有の英雄像を持っており、その英雄像に近づくための英雄行為に乗り出す内在的な特性がある。そのような指摘をベッカーがしていた。

人間存在に関する洞察を深め、その人と深く関係する際に、目の前にいる他者がどのような英雄像を描いており、その人の英雄行為を形作る認識の枠組みを理解することが重要になる。いや、より望ましいのは、その人が人生において未だ英雄になれていないと劣等感を感じる感情の所在がどこにあるのかを理解することが、その人を深く理解する上でカギになるとベッカーは述べている。

ここで注意が必要なのは、そうした英雄像そのものが個人的な産物のみならず、文化的な産物であるということだろう。私たちの社会には、英雄を人為的に作り上げていく巧妙な仕組みがある。

ベッカーは文字通り、それを「英雄システム（hero system）」と表現しており、それはいかなる社会にも存在しており、悪や死に打ち勝つことを人々に約束するような仕組みとして機能している。社会は、先日の日記で書き留めたように、スケープゴートを立てるが、それだけではなく、同時に英雄も打ち立てる。それらのどちらもが、実は私たちの目を私たち自身から背けるための道具になっており、中でも死への恐怖から私たちの目を背けるために巧妙に活用されている。

ベッカーの指摘の中で印象に残っているのは、人類の歴史を通じて、死というものが権力の維持のために搾取されてきたという事実である。それは過去形ではなく、現在進行形として存在している事実だろう。

皮肉なことに、死というものが搾取され、死が宙吊りにされる形で生と死が分離した状態で私たちは生かされている。もしかすると、搾取の対象は死のみならず、生でもあるかもしれない。生と死は本来不可分なものであるから、その片方が搾取されてしまうことは、もう片方の搾取も意味しているだろう。仮に生と死の二つが搾取されているのであれば、私たちはいかように生きればいいというのだろうか。そうした二重の搾取を被る中で、私たちは虚構の英雄像を追い求めることに仕向けられているのかもしれない。

© YOHEI KATO 2019

この現代社会の仕組みは本当に歪である。いや、人間を巧みに矮小化し、家畜化するという点に関しては、これほどまでに精密精巧なものはないと言えるかもしれない。

もう少しだけ文章を書いたら、作曲実践に移ろうと思う。私たちは発達の過程で、遅かれ早かれ、二つの対極的な事柄に気づく。一つは、自らが何者にも代えがたい固有な存在であるという気づきである。もう一つは、そうした固有性と共にある自らの命が有限であるという気づきだ。この二つに気づくと、両者に板ばさみになることが避けられない。そこには、何者にも代えがたい固有であるはずのものが、永遠たりえないという苦悩が生まれることになる。

人類の歴史上、私たち一人一人の存在は唯一無二なのだが、その存在が永遠たりえないというのは皮肉なことである。こうした皮肉、ないしは二つの気づきに板ばさみにされることによって生じた苦悩を乗り越えていくためには、固有性の向こう側を見出し、有限性の自覚を通じて、有限性の向こう側を見出す必要があるだろう。そこには、固有性も普遍性もなく、永遠も非永遠もない。いや、それら全てがそこにあり、それら全てがそこにないということに気づければ、上述の苦悩を乗り越えることができるのではないかと思う。

目の前の通りを走り去る車の音が、そしてこだまする小鳥の鳴き声が、その考えに賛同を表明してくれている。フローニンゲン:2019/2/13(水)11:30

3825. 自我の言語記述活動と自己保存欲求

時刻は午後の八時を迎えようとしている。今から数時間前、闇夜が近づいてきた時に聞こえる小鳥の鳴き声が格別な美しさを持っていた。

冷たい闇夜の世界に響き渡る小鳥たちの鳴き声にただただ耳を傾けていた。すると、意識だどんどんと深まっていき、黙想的な意識状態に参入した。

小鳥の鳴き声と、その音色を一段と美しく響かせる闇夜の雰囲気が相まって、意識の変容状態を体験していた。そのようなことをふと思い出していた。

こうした何気ない自然現象に対して、人間の意識が変容しうるということは実に興味深い。自然と意識は密接なつながりを持っており、自然は意識変容の触媒として機能しうるということを改めて実感する。

今日は、アーネスト・ベッカーの“The Birth and Death of Meaning: An Interdisciplinary Perspective on the Problem of Man (1971)”を読み終えた。本書から得られた洞察は多岐にわたるが、今直感的に一つ選び出すならば、自我が行う言語記述活動と自我の自己保存欲求との関係性に関するものを挙げることができるだろう。

おそらく究極的には、名付けをすること、すなわちこの世界を言語で記述しようとする衝動は、自我の自己保存欲求から来るものだろう。自我は世界を語ることで、世界を安心した場に変えていく。

未知な世界に対して少なからぬ不安を覚えるのは人間の性であり、それと同様に、語れない世界に対して不安を覚えるのが自我の特性だと言えるかもしれない。もちろん自我のそうした特性に気づき、自我が根源的に抱く不安感を乗り越えていくことは生半可なことではないが、スザンヌ・クック=グロイターやジェーン・ロヴィンジャーをはじめとして、自我の発達論者の研究を眺めてみれば、それは高度な自我の発達段階において可能であると言える。

自我が言語記述活動を通じて外面世界に対してのみならず、内面世界に対して記述を行おうとする背後にも、自己保存欲求も存在していると言えるだろう。自己を言語を通じて客体化させるということは、客体化される存在が自己に存在しているということを確認する意味で、自己客体化という行為によって、自我は巧妙に自己保存欲求を満たしていると言えるかもしれない。

そのように考えてみると、自己及び世界を記述すること、つまり言語化することは、自我の自己保存欲求に根ざされたものだと考えることができる。自我の言語記述活動における狡猾な点は多岐にわたるが、その一つとして、ある対象を客体化することによって、その存在を明るみにし、自己保存に活用できる道具とみなすという巧妙な特性がある。自我は実にこれがうまい。また、単にそうしたことを巧妙に行うだけではなく、自己保存に活用していることを私たちに悟らせない形でそれを遂行することにも長けている。

© YOHEI KATO 2019

夕食前の入浴中に、自我のこれらの側面について考えを巡らせていると、自我の狡猾な部分に気づくことは、ひょっとすると、それすらも自我の計らいであり、それによって自我の最重要な狡猾さを隠蔽することにつながっている可能性もあると考えていた。

だが、これまでの経験上、特殊な意識状態において、自我の真正な顔と鉢合わせする体験が何度もあり、自我の最重要な狡猾さとその手口については随分と明るみになっているように思う。また、自我の性格を配慮して、そうした狡猾さをあまり問い詰めすぎないこともまた、自我が真正な顔を表に出し、少しずつ自我が一点の自己に帰還していくことを促すことにつながるだろう。そのようなことを入浴中に考えていた。フローニンゲン:2019/2/13(水)20:10

3826. 創造という実践道

気がつけば今日も一日が終わりに近づいてきており、明日の足音が聞こえて来る時間となった。明日は午後に、ハーバード大学教育大学院のスカイプ面接がある。

思い返してみると、最後に大学院の面接を受けたのはそれほど遠い昔ではなく、フローニンゲン大学の実証的教育学のプログラムに出願した時だ。あの時は、三人の教授と直に面接を行った。その時の面接はとてもカジュアルな形であり、大変リラックスした気持ちで面接を受けていたことを覚えている。明日はアドミッションのエミリーという方と一対一で話すだけなので、前回以上にリラックスできるだろう。念のため、明日の面接の前には、出願した書類一式に再度目を通し、再度自分の志望動機とこれまでの経歴について振り返っておきたいと思う。

今日はこれから、一日を締め括る作曲実践を行いたい。午後の作曲実践の際に、死の香りに魅惑される美しい蛾と人間の間には何か違いがあるだろうかということを考えさせられていた。

人間は死を恐れ、蛾は死を恐れないかもしれない。一方で、両者は共に死の美しさの虜であるとも言える。そのようなことを考えていた。

死の美しさについては様々な側面があり、同時に偽りの美も存在していることに注意しなければならない。真正の美と偽物の美を見間違う時、私たちは自己を傷つける形で無理に死へ向かおうとする誤った行動に出てしまうだろう。

今日もまた、日記の執筆と作曲実践を中心に据えて過ごした一日だった。ふと、創造行為を通じて自己満足を得ようとすることがいかに馬鹿げているかについて考えていた。創造行為に従事したところで、創造を司る根幹の自己は満足感など覚えようがないのだ。創造行為の主体は、そんなものには微動だにしない。それは、一つの創造行為が終わると、次に向かっていくエネルギーとしてそこに存在している。あるいは、それを受け取るのが創造行為の根幹にある自己だと言えるかもしれない。いずれにせよ、創造行為を通じて満足感を覚えるというのは、創造という実践道においては、道半ば、ないしは道の初歩の初歩の段階にあるのではないかと思う。

今日はこれからモーツァルトに範を求めて作曲実践をする。その際に、仮に曲の一部をリピートさせるのであれば、特にその接続関係を意識しようと思った。これまでも比較的、繰り返しに際する接続関係については意識を持っていたが、もう少しコード進行の観点やメロディーの観点など、水平・垂直の双方から意識を研ぎ澄ませていくことが可能だと思う。

仮に作曲実践が速やかに終わったら、就寝までの時間を使って、ウォルター・ピストンのハーモニーに関するテキストを読み進めていきたい。気が早いが、この夏に日本に一時帰国する際には、その書籍を段ボールに詰めて送るのではなく、自分の手元に絶えず置いておき、繰り返し読んでいこうと思う。

ここからはよりいっそう実験を重ねていく必要があり、数多くの実験案を生み出すためにも、理論書を読んでいく。数多く作曲実践を行うこともまた、実験案の創出につながる。ピカソが画家としての生涯の最後の最後まで、毎回の絵画制作を実験の場だとみなしていたことを思い出そう。フローニンゲン：2019/2/13（水）20:25

3827. 一日の始まりに

時刻は午前七時を迎えた。今日もまた静かに一日が始まった。これから少しずつ今日の活動に入っていこうと思う。

起床直後に天気予報を確認すると、晴れの日はまだまだ続き、天気予報が表示されている来週の木曜日まではずっと晴れのようだ。気温に関しても、最高気温は10度を軒並み越しており、とても暖かく感じられる日が続きそうである。

今日は一時間後に協働プロジェクトに関するオンラインミーティングがあり、午後にはハーバード大学教育大学院のスカイプ面接がある。面接が行われるのは午後三時であり、面接時間は10~15分とのことであるから、面接後にランニングとウォーキングを兼ねた外出をしたいと思う。とにかく、天気が良い日には太陽の光を浴び、体を軽く動かすことにしたい。

昨夜作曲実践をしている時に、その瞬間の気分や時刻によって選択する調が異なることに改めて気づいた。おそらく時間帯が気分に影響を与えており、気分によって調性が変わると述べた方が正確だろう。気分によって選べる調、選べない調がわかってきたことは進歩の証だろう。ここからは、この感覚をより洗練させていきたいと思う。具体的には、どの調にどのような気分が対応しているのかをより明確にしていく。そのためには、両者の関係性を言葉の形として残しておくのも一つの手だろう。また、曲によって喚起される感覚を絵にした際に、その横に感覚に関するメモを残しておくというのもいいだろう。そうした工夫を施しながら、内的感覚と調との関係をより明瞭かつ深いものにしていきたいと思う。

今日の読書としては、エディス・ワイスコグロッドの“Spirit in Ashes: Hegel, Heidegger, and Man-Made Mass Death (1990)”を読み進めていきたいと思う。本書は過去に全体を通して眺めているのだが、それは随分と前のことであるため、再度全体を眺め、目次を参照しながら、自分にとって最も関心のある章を特定していくことから始める。

今日は、最も関心を引く章を中心に一読し、明日にその他の章についてもさらいながら読んでいこうと思う。本書に並行して、引き続き、ウォルター・ピストンの“Harmony (1978)”を読み進めていく。昨夜も少しばかり本書を読み進めており、それがいかに微量であっても、少しずつ知識を獲得していくことを行っていきたいと思う。作曲上、こうした知識の獲得は本当にバカにできず、むしろそれがいかに大切かを日々実感する。

新たな知識を取り入れるたびに、新たな実験案が浮かび、その案を試してみることによって、新しい発見事項と出会う。そして、その発見事項から新たな課題意識が芽生え、学びたいと思う知識項目がどのようなものかが明らかになっていく。そして再び知識を得るために書物を紐解くと、そこでもまた実験案が得られる。このようなプロセスを通じて学習と実践を繰り返し行っていると、いつの間に

やら知識が身体知化されており、理論に対する理解と作曲の技術の双方が深まっていることに気づく。

ここからもまた、得られた知識について文章に書き留め、実験案及び実験を通じて何がわかり、何が新たな課題として浮上したのかについても文章にしておく。絶え間ない学習と実践を実現させていくための最良の補助として、文章の執筆が存在していることに気づく。

文章を書くというのは本当に奥が深く、それは作曲の技術のみならず、自己を深めることを支えるものでもあることを考えると、文章を書くというのは多様な領域の知性及び自己そのものを涵養してくれる優れた実践だと言えるだろう。フローニンゲン：2019/2/14（木）07:20

No.1678: The Interstice between Winter and Spring

I think that it has recently been in the interstice between winter and spring. Groningen, 21:15, Thursday, 2/14/2019

3828. 高度に発達してしまうことへの恐れを超越したことを示唆する夢

時刻は七時半に近づきつつある。日の出の時間が随分と早くなり、この時間帯から空はダークブルーに変わり始めるようになった。

空が闇からダークブルーに変わっていく姿を眺める時、一日が確かに始まろうとしていることを実感する。今日もまた充実した一日になるだろう。そのような確信があり、そうした確信はいつもそれを裏切らない。確信を通じて生きる日々が淡々と続く。日々は確信の化身であり、日々は充実感の化身と化した。

とにかく今日も、一歩一歩自らにできることを行い、この世界との関係性の中で自己を深め、その関係性の網の目の中に何かを還元していこうと思う。今この瞬間に執筆しているこの日記もまた、それを実現させる実践に他ならないことを改めて思う。

今朝方の夢についていつものように振り返っておきたい。夢の中で私は、ハワイ島にいた。厳密には、これからどこか別の島からハワイ島に向かうことになっていた。その島とハワイ島は比較的近い

距離にあるが、移動に関しては、基本的に飛行機や船を使うことになっていた。だが私は、二つの島の間を飛んで移動しようと思っていた。

これまでの夢の中では、基本的に何か物体を使って飛行することはなかったのだが、今回の夢の中ではある物体を使って飛行することになった。それはバランスボールであった。

私は一つのバランスボールを脚の間に挟み、その格好のまま飛行することになった。飛行してしばらくは非常に順調であり、眼下には綺麗な海が見えた。しかし、バランスボールを脚の間に挟みながら飛行するというのは窮屈な姿勢であったから、しばらく飛行すると休憩が必要だと判断した。ちょうど眼下に小さな島が見えたので、私はそこでくつろぐことにした。

島に降り立ってみると、そこもまたリゾート地のようであり、ちょうど私はホテルのプールサイドに着地したようだった。偶然にも、プールサイドには私の友人がいて、彼に声をかけてみた。彼は小中学時代の友人だが、それほど親しくしていたわけではない。彼は、私がバランスボールを脚の間に挟んで飛行していたことを驚いているようだった。

少しばかり彼と雑談をした後に、私はもうしばらくプールサイドでくつろぎ、その後しばらく経ってから、再び飛行しようと決心した。すると、今度は脚の間にバランスボールを挟んでも、身体が宙に浮かぶ感覚が全くなかった。おかしいなと思って色々と試行錯誤していると、プールサイドの前を見知らぬ若い女性が通りかかり、私に助言をしてくれた。また、ちょうど同じタイミングで、高校時代の英語の先生がその場に現れ、似たような助言をしてくれた。それはバランスボールを挟む角度に関するものだった。

彼らの助言に従ってみると、少しずつ体が宙に浮き、私は再び飛ぶことができた。この調子ならハワイ島まで一気に行けると思っていたのだが、なぜか予知能力が働き、途中で天気が崩れることが予想された。

そこで夢から覚めた。今朝方はそのような夢を見ていた。今回の夢においては、飛行の仕方がとても特徴的であった。また、実際に飛行している最中は、かなりの高度を飛んでいたが、それに対しての恐怖感はなかった。もしかすると、高い場所を飛ぶこと、及びそれが暗示する何かに対して恐怖感を抱かなくなり始めているのかもしれない。高い場所を飛ぶことが何を暗示しているのかにつ

© YOHEI KATO 2019

いてはいろいろなものが考えられるが、一つには自我及び何かしらの知性領域における発達が高度化することが挙げられるだろう。

ここ最近感じているのは、私はもう、自我及び何かしらの知性領域が高度に発達してしまうことに対しては諦念を持っている。そこには、以前のような発達を希求するという思いもなければ、ここ数年間実感していた発達してしまうことへの恐れもない。もはやそうしたものを超え、発達することに関しては諦観を持っている。まさに、数日前の日記で書き留めたように、発達とは如来性(来るが如しもの)を持っているのであるから、こちらにはどうすることもできないのだ。

今朝方の夢が明らかにしているように、高い場所を飛ぶことそのものへの恐れはどこかに消えたようだ。一方、夢の最後の場面において、ハワイ島に向けて飛び立つ時、途中で天気が崩れることを予想していた自分がいたことは興味深い。これはもしかすると、これからの発達プロセスにおいて、また別種の困難が付きまとうことを暗示しており、それを自分はすでに気づいていると見ることもできそうだ。

夢というのは本当に自己発見を促す貴重な素材で溢れており、今後も夢の中で現れたシンボルについて考察することによって、自己の変化や自己の状態について観察を続けていきたいと思う。フローニンゲン:2019/2/14(木)07:45

3829. 春の予感を感じながら

時刻は午後の一時に近づきつつある。先ほど昼食を摂り終え、その後少しばかり過去の日記の編集を行っていた。

今日は本当に天気が良く、春を予感させてくれるには十分だ。この時間帯もまだ小鳥が鳴き声を上げており、とても平穏な気持ちになる。

今朝、ヨギティーを作っている時に、ティーバッグの「平穏さの境地に至ることが最大の達成である」という趣旨の言葉に目が止まった。日々の生活の中に絶えず平穏さを見出し、平穏さの中で生きられることほど幸福なことはないのかもしれない。優しく降り注ぐ太陽の光を浴びながら、そのようなことを思う。

今日は朝一番に、協働プロジェクトに関するオンラインミーティングを行った。こちらは早ければ三月から具体的に動き始めるだろう。先方及び協働者の方と密な協働を行っていき、プロジェクトの目標を遂行していきたいと思う。

ミーティング後、作曲実践を行った。曲を作る中で、やはり最近は春を感じられるようになってきているためか、今日の曲も明るい感じのものになった。特に、オレンジ色や黄色が滲み出すような曲が生まれた。

今朝方の日記で書き留めていたように、やはり自分を取り巻く環境と内面の状態が曲に滲み出すことになるのだろう。そのように考えると、曲というのは確かに最終的には作曲家が音の形として生み出していくものだが、その具材となるものは作曲家と環境との相互作用によって生まれるものなのだということがわかる。日々の曲は、自分がその環境と相互作用した結果として生まれたものであることを忘れないようにする。環境との相互作用の大切さ、及び自分がどのような環境に身を置くのかの重要性を改めて知る。

あと二時間ほどしたら、ハーバード大学教育大学院のスカイプ面接がある。それはオランダ時間では午後の三時、ボストン時間で午前九時に行われる。面接を担当してくださる方は、もしかしたら今あたりに起床し、これからハーバード大学のオフィスに向かう頃かもしれない。そのようなことを想像すると、どこか微笑ましい気持ちになる。

面接を受ける当人としての私は、これからいつもどおり仮眠を取り、その後、今回の出願資料をもう一度眺めておこうと思う。この確認にはそれほど時間がかからないと思うが、とりあえず、志望動機書を一、二回ほど読み返し、自分の経歴がまとめられたCVについても読み返しておこうと思う。面接の時間が楽しみであり、それを待ち遠しく思う。面接が終われば、気分転換として、近くのサイクリングロードにランニング兼ウォーキングをしに出かける。

今日のように天気の良い日は、とにかく外に出かけて体を動かし、外の新鮮な空気を吸うようにしたい。外出から戻ってきたら、再び作曲実践をして、夕方の読書を開始しようと思う。起床直後に想像していた通り、今日もまた充実感の中で物事が進行していく。フローニンゲン：2019/2/14（木）13:06

3830. 暖かな午後より

先ほど散歩がてら行きつけのチーズ屋に立ち寄った。天気が悪い日が長らく続いており、この二週間は特に天気が悪く、チーズ屋に行く腰が重かった。そのため、チーズに関しては近所のスーパーで購入を済ませており、今日は結局チーズ屋でチーズを購入することはなく、お決まりのナッツ類だけを購入した。来週からはまた、このチーズ屋でチーズを購入したいと思う。

今日は気温も暖かかったため、インナーを薄めにして散歩に出かけた。明日は今日と同じぐらいに天気が良いようなので、久しぶりにノーダープラントソン公園へランニングに行き、インドネシア料理店で昼食を購入しようと思う。

散歩に出かける前に、ハーバード大学教育大学院（HGSE）のアドミッションの方とスカイプ面接を行った。予想していた通りカジュアルな会話をすることが主眼に置かれており、その中で二、三の質問に関してはTOEFLのスピーキングのようなものがあった。最初にアドミッション担当の方とカジュアルに会話をした後に、それらの質問を受けた。

最初の質問は、「人の偉大さは他者の評価を必要とするか否か」について賛成または反対の意見を述べるというものだった。これはTOEFLのスピーキングを彷彿させるものであり、今回の面接の中でそのような問い掛けを受けるとは思っていなかったので、最初面食らったが、とりあえず自分の意見を述べた。その後も、最近見た映画の話、最近のニュースや新聞記事で気になったものに関する質問などを受けた。これらもまたTOEFLに似たような問いであった。

面接に関しては、特に面接だと意識することなく、とりあえず普段通りに話をすることができていたように思う。今回の面接がどれだけ重要なものかはわからず、後から考えてみると、もう少し違う受け答えができた可能性もあったと思うが、すでに済んだことなので今さらあれこれ考えてもしょうがない。面接の最後には、こちらから二つほど質問をさせていただき、そこで面接を終えた。時間にして15分ほどであっただろうか。

今回私がHGSEに出願したのは芸術教育プログラムである。このプログラムにどれだけの志願者がいたのかはわからないが、狭き門であることには変わりないだろう。出願の結果は、例年の傾向から察するに、今からおよそ三週間後にわかるだろう。その結果を踏まえて、この夏からアメリカで生活

を始めるのか、スイスで生活を始めるのかを判断したいと思う。いずれにせよ、今はスカイプ面接を終えて、ひと段落した感覚がある。

今日はこれからバッハのコラールに範を求めて作曲実践をし、早朝の予定通り、エディス・ワイスコグロッドの“Spirit in Ashes: Hegel, Heidegger, and Man-Made Mass Death (1990)”を読み進めていきたい。

先ほど外出した時に、郵便受けに“Music, Madness, and the Unworking of Language (2013)”がイギリスの書店より届けられていた。予定よりも少しばかり早い到着であり、明日から本書の初読を始めていこうと思う。フローニンゲン：2019/2/14（木）16:33

No.1679: A Peaceful Morning

I can hear small birds singing. This morning is more peaceful than usual. Groningen, 09:24, Friday, 2/15/2019

3831. 新たな環境への適応課題について

時刻は午後の八時を迎えた。今日は本当に天気が素晴らしい一日であった。明日は今日よりも天気に恵まれるとのことなので、大きな期待を寄せている。今日もちぎれ雲程度しかなかったが、明日はまったく雲のない青空が見られるかもしれない。

今日の夕方に見た夕日はとても美しかった。ちょうど幾筋かの飛行機雲が空にかかっており、それが線香花火のような姿に見えた。色味のついた夕方の空に、真っ白な飛行機雲が線香花火のように顕現していた。夕日をぼんやりと眺めていると、午後の六時を過ぎてもまだ明るかったことを覚えている。

もう随分と日が伸びた。こうした変化もまた、春の到来に一歩近づいたことを示している。春は本当にもうすぐだ。

今日は午後に、ハーバード大学教育大学院のアドミッションの方とスカイプ面接を行った。時間としては15分程度の短いものであったが、いくつかのやり取りが印象的であった。一つは、会話の前半

で、何気なく尋ねられたことだ。それは、オランダからアメリカへのトランジションをどう捉えているのか？というものである。私は、「端的には、それを肯定的に捉えている」ということを述べ、いくつか理由を述べた。面接の後、近所のチーズ屋に歩いて向っている最中に、その問いについて改めて考えていた。

今回のトランジションは、確かに肯定的なものだと思われるが、仮にオランダから本当にアメリカで生活を送ることになると、オランダにやってきた初年度と同じような諸々の適応をしなければならないだろう。確かに、私は過去にアメリカで四年ほど生活をしており、そのうちの二年ほどは大学院で過ごした。そうしたこともあり、再度米国の大学院で学ぶことそのものは困難なことは全くないと思われる。また、今回仮にアメリカに行くとするならば、東海岸での生活を送ることになるが、四年間のうち半年ほどはニューヨークに住んでいたこともあり、東海岸で生活をすることの懸念もない。

だが、仮に日本国内で居住地を変えることですら、何かしらの身体的かつ精神的な適応を迫られることを考えると、今回もまたゆっくり時間をかけなければならない適応課題というものと直面する可能性が高い。というよりも、そうした課題と必ず直面することになるだろう。

オランダに三年間住むことによって、この国、特にフローニンゲンという町は極めて慣れて親しんだものとなった。そこから突然離れ、アメリカのボストンで生活をすることは、必然的に新たな適応課題を私に突きつけてくるだろう。しかも私は、仮にアメリカに渡ることになれば、その前にはビザ取得の都合上、日本に戻る必要があり、その時には一、二ヶ月ほど札幌で生活をしようと思っている。北海道で生活をしたことなどなく、ましてや北海道に過去一度も足を踏み入れていないため、オランダから北海道で生活をする際にもまた別種の適応を迫られるだろう。その適応課題をどれくらいの時間で乗り越えることができるのか定かではないが、もしかしたら、課題と向き合っている最中にアメリカに渡ることになるかもしれない。

実は私は、居住地の変更は馬鹿にすることのできないほどに大きな心理的影響を人に与えると思っている。それが仮に、慣れ親しんだ場所から別の場所、しかも別の国に居住するのであればなおさらその心理的な影響は大きくなるだろう。そうしたこともあり、オランダから北海道に移る際、そしてオランダから再び別の国に居住する際には、慎重に適応課題と向き合いたいと思う。この十年の間に、東京→大阪（二年）→サンフランシスコ（二年半）→ニューヨーク（半年）→ロサンゼルス（一年）→山

ロ(三ヶ月)→東京(一年)→フローニンゲン(三年)と移り住んできた経験を活かし、今回経験するであろう適応課題からは多くのことを学びたいと思う。フローニンゲン:2019/2/14(木)20:36

No.1680: A Song of the Sun

It is impeccably fine weather today. I'll go running in the afternoon. Groningen, 11:45, Friday, 2/15/2019

3832. 今朝方の夢

今朝は六時半あたりに起床し、七時を迎える前に一日の活動を始めた。起床してすぐに気づいたが、やはりそれほど寒さを感じない。今週一週間の気温を確認すると、軒並み暖かく、フローニンゲンの気温が東京の気温を上回ることは年間を通してないはずなのだが、今週はそのような現象が起きている。ここからの七日間も雨に見舞われることなく、天気が良い日が続きそうで何よりだ。

いつもの通り、今朝方の夢についてまずは振り返っておきたい。夢の中で私は、初めて訪れるフットサル場にいた。そこは屋外コートではなく、屋内コートであり、その場には大学時代のフットサルサークルの先輩が二人いた。その他にも人がいたのだが、どうやら彼らは顔見知りではないようだった。

私は先輩のうちの一人と、一対一の練習をしていた。その先輩はサークル内で最も技術があり、一対一をするときは大抵負けていたのだが、その時はなぜだか関係が逆転していた。少し様子がおかしいと思い、先輩の体調を尋ねたところ、どうも体調が悪そうだった。一対一の練習をした後に、その後はもう一人の先輩と見知らぬ人たちを交えて、シュート練習を行い始めた。

しばらくシュート練習をすると、そろそろ練習を切り上げる時間が迫ってきており、私は程よいところで練習を切り上げ、シャワー室に向かった。するとそこには、小中学校時代の友人が何人もいて、全員シャワーを浴びている最中だった。彼らに挨拶をするよりも先に、私は彼らに「どうしたの?」と思わず尋ねた。というのも、彼ら全員の背中やお腹にはいくつもの赤い斑点があったからである。

私は、彼らが何かの病気にかかっているのではないかと心配した。彼らの身体にはそのような赤い斑点があったが、心に関しては元気なようであり、全員が「どうもないよ」と明るく答えた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、日本のある大都市の街中を走るシャトルバスの中に私はいた。どうやらこれから、ある大きなホテルに向かい、そこで講演会か何かに参加することになっているようだった。シャトルバスに乗ってしばらく揺られていると、ある場所で停車し、そこが目的地かと思ってそこで降りた。しかし、どうやら目的地のホテルとは違うホテルで降りてしまったとすぐに気付いた。

近くには他のシャトルバスに乗れるバス停があり、そのバスが目的地に着くかを確認しようと思った。だが私はそれよりも先に、喉が渇いていたので、目の前にあったコンビニでコーヒーを購入することにした。

コーヒー売り場に行くと、そこには変わったコーヒーが売られていた。一見すると、プラスティックの容器に入った普通のコーヒーなのだが、それを手に取ってみると、中身が液体のコーヒーではなく、コーヒー豆が詰められていることに気づいたのである。

容器の外から中を見ると、何種類かのコーヒー豆の中に、チョコレートの塊がいくつか入っているようだった。手に取ったコーヒーの横に並べられているコーヒーも確認してみると、それぞれ、複数のコーヒー豆のブレンドの度合いだけではなく、チョコレートの苦味の度合いや種類も異なるようだった。

普段私はブラックコーヒーしか飲まないのだが、その時はなぜか一番甘そうなコーヒーを選んだ。それを持ってレジに向かおうとした瞬間に、私は瞬間移動し、目的地のホテルのロビーにいた。

そのホテルはとても豪華な造りをしており、建築されてからまだそれほど日が経ってないことを察した。ロビーをウロウロしていると、偶然にもそこで、小中高時代の親友（HO）に出会った。彼もこれから講演会に参加するようであり、講演会まで時間があったので、ホテルのラウンジでくつろぐのはどうかと私は提案した。ちょうど所持していたクレジットカードを使えば、ホテルのラウンジが無料で使えるので、その旨を彼に伝え、彼にもそのカードをお勧めした。

大きなエレベーターに乗り、ラウンジのある最上階に着いた時、そこが講演会場であり、もう何人かの人たちが席に着いていることに気づいた。親友と私は、一瞬、「あれおかしいな？もう始まるのかな」と思った。とりあえずラウンジでくつろぐことは一旦やめにし、自分たちの席を確保することをまず

行おうと思った。席を探していると、壁際にホワイトボードが置かれていることに気づき、ホワイトボードの前に小中学校時代の別の親友(KF)が立っている姿が目に入った。

偶然彼の姿を見かけたとので、私はすぐに彼に声をかけに行った。すると彼はそこで、数学の問題を解いているようだった。周りを見ると、ホワイトボードの周辺は何台ものコンピューターが置かれており、その一角だけコンピュータールームのようにも思えた。私は彼が数学の問題を解いていることを邪魔しないように、少しだけ雑談をして、再び席の確保に戻った。すると、席がある各テーブルの上には、先ほど私がコンビニで購入したコーヒーが置かれていた。見るとそれらは全て、私が選んだものとは種類が違うブラックコーヒーであった。フローニンゲン:2019/2/15(金)07:32

No.1681: An Overwintering Way

I've recently felt that the season started to walk on an overwintering way. Groningen, 15:58, Friday, 2/15/2019

3833. 晴れ渡る早朝の朝

時刻は午前八時を迎えた。辺りはすっかり明るくなり、雲ひとつない空に朝焼けが映し出されている。遠くの空は薄赤色をしており、手前の空に近づけば近づくほど、青みがかかっている。カモメたちもどこか嬉しそうに空を飛んでいる。

赤レンガの家々の屋根に朝日が反射しており、その様子を今ぼんやりと眺めている。今日もまた平穏な一日となりそうだ。

早朝に一日分のお茶を入れた時、そのティーバッグに付されている言葉に目が止まった。そこには、「幸福とは真にくつろぐことである」というような意味の言葉が書かれていた。私はそれに強く同意し、その言葉が付されたタグを外し、それをノートに貼り付けておいた。今日もまた、くつろぎの中で一日を進めていきたい。

往々にして、自我は私たちをくつろがせるのではなく、無性に不安に駆り立てたりする。私たちの自我はもしかすると、くつろぐことを恐れていると言えるかもしれない。自我はもしかすると、私たちが真にくつろぐというのは自我が溶解し、その瞬間と一体化することであるということを知っているのだ

が、それを快く思っていないのかもしれない。仮に自分の自我に何かを伝えるとするのであれば、それを恐れる必要は全くないと述べたい。

確かに、私たちが真にくつろぐとき、くつろぐ者さえもが消滅してしまうかのような感覚になるが、それは自我が完全に消滅してしまうことを意味していない。端的には、自我もまたくつろげるのであり、自我はくつろぎそのものになれるのだ。

基本的に私たちの自我は、くつろぐことを知らず、私たちを不安に駆り立てるような振る舞いを頻繁に見せる。自我は、くつろぎと自分を分離することによって、その存在を保とうとする。だが、私たちが真にくつろぐというのは、自我そのものもまたくつろぐ必要があり、自我のそうした分離衝動を極度に和らげることだと言える。ここからしばらくは、自我と自己そのもののくつろぎをテーマに据えてみようと思う。

これから一日の活動を本格的に始めていこうと思っていると、起床直後の半覚醒の意識の中で書物を読んでいたことを思い出した。その書物は英語で書かれており、私はすぐに体を起こすのではなく、しばらくベッドの上で仰向けになって目を閉じながら、心の中でその書物を読んでいた。その書物の内容はもう覚えていないが、その内容が自分の内側に染み込んでいくような感覚があった。

今日は、昨日に届いた“Music, Madness, and the Unworking of Language (2013)”の初読を始めようと思う。いつものように、初読の際は、最初から一字一句を読んでいくのではなく、まずは目次を眺め、最も関心を引く章を特定し、そこから読み進めていくようにする。関心を引く章を読み終えたら、今度は最初から最後までざっと残りの章の内容を追っていく。そうしたことを本日行いたいと思う。

今日は天気が極めて良いようだから、久しぶりにノーダープラントソン公園へランニングに行き、その足で行きつけのインドネシア料理店に立ち寄り、昼食を購入したい。今日も旺盛な探究活動と創造活動に励みたい。フローニンゲン：2019/2/15（金）08:16

No.1682: A Joyful Dance of a Little Bird

Today looked as if a myriad of little birds were doing a joyful dance.

I wish tomorrow to be the same as today. Groningen, 21:39, Friday, 2/15/2019

3834. この夏からの選択肢

時刻は午後の五時に近づきつつある。一ヶ月前までは、この時間帯になるともう暗かったが、三月も近づく最近においては、この時間帯はまだまだ明るい。昨日の観察をもとにすると、六時を回ってもまだ薄暗い程度であった。今日もあとしばらく美しい夕日を拝むことができるだろう。

今日は本当に天気が良く、雲一つない青空がずっと広がっていた。早朝の小鳥のさえずりは印象的であり、その音に耳を傾ければ傾けるだけ、意識が深まっていったことを覚えている。

季節が越冬の道を歩き始めている。そのようなことをここ最近強く感じる。

先ほどまで、30分程度、近所のサイクリングロードをランニングしたりウォーキングしたりしていた。これは実に良い気分転換になる。

この季節を迎えるまで、本当に毎日が寒く、そして鬱蒼とした空模様であったため、太陽の光を浴びれる季節が再びやってきたことを大変嬉しく思う。人間の精神生活を健全に保つためには、太陽の光は不可欠なものであるということをこの三年間の欧州生活を通じて身を持って学んだ。

ハーバード大学教育大学院の合格発表まであと三週間ほどだが、合否に関わらず、この秋からの選択肢についてはもう少し考え直そうと思った。当初は、アメリカかスイスかで迷っていたが、改めて先ほど精神自由科学大学について調べていると、その大学でシュタイナーの思想を学ぶのは少し時期が早いように思えた。これは諸々の意味においてである。もう少し探究テーマを明確にする必要性がある。今はまだそのテーマ設定が不明確だ。

そうしたことを考えると、仮にアメリカで生活を始めない場合は、オランダに残るかもしれない。その際には、ビザを取得する必要がある。

今年は、アメリカで言うところのOPTに該当する制度を活用し、一年間ほどさらに延長してオランダに滞在することができた。その有効期限が切れると、その先からはビザが必要になる。その際には、

フリーランスビザを取得することになるだろう。二人の日本人の知人の方がそのビザを取得しているため、仮にオランダに残ることにした場合には、二人に相談したい。

オランダに残る場合は、フローニンゲンに留まるか、あるいはアムステルダム郊外かロッテルダムあたりに引っ越すかもしれない。それらも含めてまた改めて考えようと思う。

そうなってくると、この夏に日本に一時的に滞在することになるのは、アメリカで生活することを決断した場合だけだ。今のところ、この夏からの生活については選択肢が二、三ある状態であり、それらのどれを選ぶことになるのかがわからない状態に今の私は置かれている。

近い将来の生活地が未確定であるというのは、どこか宙に浮かされたような感覚があり、あまり良い心地はしない。三週間後の合格発表を受けて、今の宙吊りの感覚から解放されたいと思う。一方で、こうした感覚を生み出している何かしらの要因が自分にあることは確かだろう。今はそれとゆっくりと向き合う時期にいるように思う。

まさかこのタイミングで、再びトランジションの経験を強く感じるとは思ってもいなかったため、日々の生活では少し余裕をもたせて、このテーマに向き合いたいと思う。そのテーマから気持ちを逸らせるために忙しく仕事をするのではなく、むしろ、ゆっくりとした時間を確保し、それと向き合うことを大切にしたい。この夏からいかなる場所で生活することになったとしても、絶えず平穏な心を持っておきたいと思う。フローニンゲン：2019/2/15（金）17:05

No.1683: A Flow of Time Approaching Spring

As well as temperature, even a recent flow of time feels like that of spring. Spring is now approaching. Groningen, 09:39, Saturday, 2/16/2019

3835. 場所との縁とパリ小旅行計画

時刻は午後の七時半を迎えた。つい先ほど、本日の夕食を摂り終えた。

今日は一日中良い天気に恵まれ、夕方には息を呑むほどに美しい夕日を拝むことができた。雲が一切ない分、特殊な輝きを持つ夕焼け空が広がっていた。そんな夕焼け空の下で、小鳥たちが木々

に止まって高々と鳴き声を上げていた。確信を持って言えるが、小鳥たちが夕暮れ時に鳴き声を上げていたのは、夕焼け空の美しさに対してである。

彼らもあの美しく輝く夕焼け空を喜んでいたのだ。小鳥たちの鳴き声は、歓喜の歌としてそこにあった。もうこうしたことは疑いようがない。自然の美に自然は応えることができるのだ。

夕暮れ時の空は、全体がオーロラのような美しさを放っていた。その他に表現しようがない。オランダで過ごすことの楽しみの一つは、こうした美しい空を眺められることにある。

夕方に散歩から帰ってきた時、もし仮にこの夏からアメリカで生活することを選択しなかった場合、スイスではなく、引き続きオランダで生活をしようという思いが強くなっている。もし過去の三年間の滞在期間が永住権獲得のために必要な期間として考慮に入れてもらえるのであれば、仮にフリーランスビザを取得してあと二年ほどオランダで生活をすれば、オランダで永住権を獲得することができる。それを獲得することができれば、基本的にはEU諸国であればどこでも生活をすることができるらしい。

私はこの三年間のうち、訪れたいと思う欧州の国の全てを訪れることができたわけではない。また、一つの国の中に、足を運びたいと思う地域がたくさんあるため、当然のことながら三年の生活ではそれらの場所を回りきることができなかった。三年間のうち、最初の二年間は大学院に所属していたのであるから、それも無理はないだろう。もし仮にオランダに残るという選択をした場合には、これから少しずつ、まだ足を運んだことのない場所を訪れたい。

仮にアメリカに行くことになったとしても、私は再びオランダに戻ってこようと思っている。それほどまでに、私にとってオランダは大切な国となった。

欧州でまだ訪れていない場所に関しては、もちろん、再びオランダに戻ってきてからゆっくりと巡ってもいいだろう。

この夏からの生活拠点をどこにするかはまだ確定していない。それは、場所との縁によって確定されるだろう。

© YOHEI KATO 2019

夕食時にも、場所との縁についてぼんやりと考えていた。これまでの私は、人との縁のみならず、場所との縁にも恵まれていた。本当にこれには感謝しても仕切れない。人間を育むのは、取り巻く人と取り巻く環境なのだ。

この夏からの生活拠点が確定するまで、もう少し時間がある。今は縁結びを待っている状態であり、いかなる場所で生活をすることになったとしても、その場所と何かしらの縁があったがゆえに、私はその場所に行くことになったと捉えることができる。

夕方に考えていたように、少し気分転換に、三月を迎える前にパリに行こうかと思う。当初の予定では、三月を迎えて、春らしくなってからパリに行く予定であったが、この調子だと、二月末でも十分に暖かく、二月末から数日間ほどぶらりとパリを訪れたい気持ちになっている。例えば、2/28にフローニンゲンを出発して、3/1にパリ郊外にあるラヴェル博物館に訪れ、3/2にドビュッシー博物館に訪れ、3/3に国立ピカソ美術館に訪れたいと思う。どうやらフォーレやサンサーンスの博物館は存在していないらしく、サティの博物館はパリからは随分と遠い場所にあるため、今回は残念ながらそこを訪れることをやめにした。

三日間の滞在中のうち、二日目と三日目には、パリ市内にある楽譜専門店を巡りたいと思う。とりあえずそのような小旅行計画を立て、今のところ、この日程であれば仕事に差し支えないようだ。フローニンゲン：2019/2/15（金）20:08

No.1684: Ambivalent Feelings

We, human beings, have various ambivalent feelings. An example would be willingness and unwillingness to do something new. Groningen, 12:06, Saturday, 2/16/2019

3836. 感謝と喜びの中で一心不乱に勉強する夢

今朝は六時あたりに起床し、六時半から一日の活動を始めた。今週も気がつけば週末がやってきて、今日から土曜日が始まる。早いもので、二月もあと二週間ほどになった。ここ最近は春の訪れを感じられるようになってきており、二月が終わり、三月がやってくると、本格的に春の訪れを感じられるようになると思われる。

昨日の日記で書き留めていたように、再来週の木曜日から、ぶらりとパリに足を伸ばそうと思う。フローニンゲンからパリまでは遠くなく、列車で数時間ほどの距離だ。

木曜日の午前中に昼食を持って列車に乗り込み、三時過ぎをめどにパリに到着するようにしたいと思う。今回はパリだけを訪れる小旅行を計画しており、四泊五日ほどの旅行になるだろう。ここ最近は良い天気が続いているので、旅行の最中も同じような天気が続くことを望む。

いつものように、今朝方の夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、日本のどこかの県の合宿所のようなところに宿泊していた。

合宿所の周りは自然で溢れており、都会の喧騒を忘れさせてくれるにはうってつけの環境だった。最初私は何の合宿だかあまり理解していなかったが、そこに集まっている人たちは、小中学校時代の友人ばかりであり、どうやら学校の勉強に関する合宿であることがわかった。

この合宿の目的がわかったところで、誰がこの合宿を運営しているのかが気になった。もちろん、そこには学校の先生が含まれるだろうが、どうも私は、先生たちだけでこの合宿を企画したのではなく、その他にも外部の人間がいるのではないかと予想をしていた。

すると、その予想通り、今回の合宿の企画者は、日本人のある有名な男性俳優であることを知った。合宿所に宿泊した日は勉強することなく、翌日から本格的に勉強合宿が始まった。生徒全員が大きな畳部屋に集まり、長机について勉強を始めようとしていた。その光景を見たとき、私は部屋に忘れ物をしてしまったことに気づき、一度部屋に引き返した。

すると、そこで睡魔に襲われ、私は自室で眠りの世界に落ちていった。目をさますと、数時間が経過しており、私は随分と寝ていたことに驚き、同時に、みんなと勉強する時間が失われてしまったことを少し残念に思った。

もう一度大きな畳部屋に戻ると、先生たちが心配そうに私に声をかけてきた。私は、「部屋で少し寝てしまっていました」と先生たちに伝えると、先生たちはそのことをさらに心配していた。というのも、私は前々から、この勉強合宿をとても楽しみにしていたようであり、勉強する代わりに寝ていたという

© YOHEI KATO 2019

ことが先生たちには信じられなかったようだった。とりあえず先生に事情を伝えると、すぐに私は長机の一角に腰掛け、勉強を始めた。

なぜだかわからないが、こうした自然に囲まれた素晴らしい環境の中で勉強できることに感動してしまい、感謝と喜びの涙が溢れてきた。私は、特に企画者を務めてくださった俳優の男性にお礼を述べた。今回の合宿を企画してくれたことに対して、どうしてもお礼が述べたかったのである。そこから私は、感謝と喜びの念に包まれながら、自分が学びを深めたいと思う内容について一心不乱に勉強を始めた。フローニンゲン：2019/2/16（土）07:11

No.1685: Spring Squared

Groningen has the atmosphere that looks as if spring which tries to break winter were doing an energetic dance. Groningen, 18:06, Saturday, 2/16/2019

3837. キャリアコンサルタントのテキストの再読と今朝方の夢の続き

時刻は午前七時を回った。たった今、本日最初の小鳥の鳴き声を聞いた。もしかしたら、小鳥たちは、私が意識するよりも前に鳴き声を上げていたのかもしれないが、私の意識に飛び込んできたのは、たった今聞こえてきた鳴き声が最初である。

昨日を振り返ると、昨日は、無数の小鳥たちが喜びのダンスを踊っているかのような一日であった。今日もそのような一日になって欲しいと願う。

今日の計画として、アーネスト・ベッカーの最重要書籍“The Denial of Death (1973)”を再読しようと思う。それに並行して、キャリアコンサルタントの資格試験に関するテキストに目を通していこうと思う。キャリアコンサルタントの資格を受けるためにそれを行うのではなく、現在、キャリアコンサルタントの資格試験用のテキストの監修をさせていただく仕事を引き受けているので、ここでより丁寧にテキストに目を通したいと思ったのである。

本件に関して協働させていただいている企業から、合計で七冊ほどのテキストを昨年の年末に日本からオランダに送っていただき、テキストの到着後、すぐに全てのテキストをざっと眺めた。

私は決してキャリアコンサルタントではなく、それを目指しているわけではないが、異なる領域の仕事から得られることは多く、また対人支援という観点でいえば、私が行っている成長支援コーチングとも関わってくることが多々あることに気づく。そうしたことから、これら全てのテキストを丁寧に読み進めていこうと思う。こうした読書に並行して、今日も作曲実践を旺盛に行っていく。

昨日は、二回ほどモーツァルトに範を求めて曲を作った。モーツァルトのメロディーから学ぶことが極めて多く、今日の実践も楽しみである。

私は、モーツァルトが五歳の時に作った曲から順番に範を求め、今はようやく、モーツァルトがちょうど現在の私の年齢と同じ時期に作った曲を参考にするところまでやってきた。これまで小さく積み重ねてきた実践が少しずつ形になり始めている。これからも、絶えず小さな実践を続けていき、実践を通じた自己発見と自己涵養を実現させていきたい。

モーツァルトに関する話を書き留めていると、そういえば、今朝方の夢の続きの中で、三台の大きなグランドピアノが並べられている部屋の中にいたことを思い出した。三台のピアノのそれぞれには、日本人のピアニストの男性がいた。残念ながら、私は彼ら三人とも名前を知らず、顔も初めて見るようなピアニストであった。

三台のピアノが隣接しており、その周りには何人かの人がいた。その中に一人、小中学校時代の友人（MS）がいた。彼に声をかけてみると、彼は化学のテキストを読んでいるところだった。テキストを眺めると、どうやら化学式に関する章を読んでいるらしい。

私は中学生の頃、化学式の面白さに惹かれている時期があり、当時の記憶を思い出しながら、彼が今何を学んでいるのかを詳しく聞いた。すると彼は突然、日本語から英語に切り替えて、英語でテキストの内容を話し始めた。

彼は帰国子女でも何でもなく、私はその行動を不思議に思ったが、意外と英語の発音が聞き取りやすく、そこからは英語で彼と話をしていた。ピアノ演奏が始まる前に、彼と化学について話をしていたところで夢の場面が変わった。今朝方はそのような夢を見ていた。実際には、この夢の場面以外にも夢を見ていたことを覚えている。だが、それらの夢の場面の具体的な記憶はもうない。仮にまた思い出すことがあれば、それらも書き留めておこうと思う。

© YOHEI KATO 2019

時刻は七時半を迎えた。今から十分ほど前には、もう辺りは明るくなり始めていた。日の出の時間がいよいよ早くなってきたことを実感する。春はもうすぐそこだ。フローニンゲン:2019/2/16(土)07:31

No.1686: The Consciousness of a Little Bird

I often think about the consciousness of a little bird. Since it is approaching spring, a little bird's consciousness must be warmer and brighter. Groningen, 21:11, Saturday, 2/16/2019

3838. 経験と学び:可能性が開かれることへの恐れ

時刻は午前11時を迎えた。穏やかな土曜日がゆっくりと進行している。

今日も天気に恵まれ、今は朝の柔らかい日差しが部屋に差し込んでいる。風もほとんどなく、非常に穏やかな天気であるため、今日も午後に、ランニングと散歩を兼ねて外出しようと思う。今日は、近所のノーダープラントソン公園に足を運び、公園を半周して帰ってこようと思う。

今日は午前中にあれこれと調べ物をすることに加えて、キャリアコンサルタントの国家資格に関するテキストを読んでいた。今回、テキストに文章を執筆させていただくという役割を引き受け、この資格試験を受験するわけではないが、頂いたテキストには全て目を通しておこうと思っている。

テキストを読みながら、いくつか考えさせられることがあった。一つには、経験から学ぶというのは、自己と社会のつながりを学ぶことであり、つながりを新たに作っていくことである、という指摘に関するものだ。

欧州で生活を始めて以降、経験というものがもはや自分に属するものではなく、自己を超えて、他者や社会との何かしらの接点のことを指すのだと理解するようになった。そして個人の経験が深まるというのは、そうした接点の深まりのことを指すということを理解し始めている。

確かに、私の経験は内側の世界の中でも深まりを見せていくが、その深まりを促しているのはこの世界との交流であり、経験が発露して、それがこの世界に還元されていくためには、まさに対象となる外の世界が必要になる。そのようなことを考えてみると、私たちの経験とは、決して自分の内側に閉じられたものではないことがわかる。こうした特性を持つ経験から学ぶというのは、まさにテキスト

で指摘されていた通り、自己とこの世界とのつながりについて絶えず考察し、新たなつながりを育んでいく実践を行うことを意味するのだろう。経験も学びも、徹頭徹尾、自己の内側の世界と、この世界という外側の世界との相互作用によって生じるものなのだ。

読み進めていたテキストには、その他にも興味深い記述がいくつもあった。中でも、実存主義的心理学者のロロ・メイの言葉に思うことがあった。

不安とは、ある可能性が自分に向かってくる際に生じるものであり、しかもその可能性というのは、肯定的なものも含み、自己の実存を充足させてくれるようなものまで含む、というメイの指摘には、ここ最近自分が感じていることに通じるものがあった。

ここ最近私は、生存の不安というよりも、実存的な不安を少しばかり感じることがあった。それはまさに、この夏から新しい場所で生活をすることに伴って生まれたものだと思う。そこで生じている不安というのは、新しい国に適応することへの不安などではなく、新しい可能性が自らの内から開かれてしまうことへの不安だと言っていいかもしれない。仮にこの夏から新しい国で生活を始めることになれば、新たな生活環境は必ずや、まだ顕在化されていない私の可能性を開くだろう。

ここ最近感じていた心の波は、自己の新たな可能性が出現すること、及びそれと向き合うことに関するものである可能性が極めて大きいことに気づかされる。自らの可能性に恐れるというのは、まさにアブラハム・マズローが指摘しているものでもある。

人は過信をする生き物だが、自らの潜在能力を恐れるという傾向も合わせて持つ。人はもしかすると、これまでの経験を通して、成長に伴う苦痛を無意識的に知っているのかもしれない。また、さらなる成長に向けた潜在エネルギーは、これまでに携えていたエネルギーよりも巨大なものであるがゆえに、そうしたエネルギーの出現に対して、人は身構え、恐れを抱いてしまうのかもしれない。

この夏からの生活に向けて、また新しい自己の側面が明らかになってきており、それは人間に普遍的に当てはまる性質であることが興味深い。フローニンゲン：2019/2/16（土）11:23

© YOHEI KATO 2019

No.1687: Insubstantiality

A new day that is insubstantial just began. Groningen, 07:47, Sunday, 2/17/2019

3839. 矛盾を抱える人間：存在に関する二種類の不安

時刻は午後の三時半を迎えた。穏やかに過ぎていく土曜日が、ゆっくりと折り返しに差し掛かっている。

これから少しばかり作曲実践をして、休憩がてら、近所のノーダープラントソン公園へ散歩に出かけようと思う。公園を散策することを通じて、春の兆候がどの辺りに見られるかを確認したい。

偶然にも午前中と午後に、人は相矛盾する事柄を絶えず内包している生き物だということを考えていた。一つには、人間は可能性が閉ざされることを恐れ、同時に、可能性が開かれてしまうことへも恐れを感じる。これは早朝に言及したことと近いかもしれない。特に後者の、可能性が開かれてしまう恐れというのは注目に価する。

今までこの観点をあまり意識することはなかったが、ここ最近の自分の内側の状態を観察していると、この恐れに関係するようなものが顔を覗かせることがあった。上記の矛盾以外にも、人は何か新しいことに挑戦する際に、進取の気持ちと同時に、どこかそうした気持ちを抑圧するような気持ちを持つ傾向にある。後者の気持ちは、自己が暴走をして生命の危機に陥らないようにするための自己防衛機能の表れかもしれない。人間の内側に存在する種々の相矛盾する事柄について、本日は二回も考えていた。

これからゆっくりと、フローニンゲンは夕方に向かっていく。今、春の陽気を感じさせてくれる太陽光が優しく街に降り注いでいる。気温のみならず、時の流れすらもが春のそれを感じさせるようになってきている。春に固有の時の流れに身を委ねる形で、日々の取り組みを少しずつ前に進めていきたい。

とにかく、塵も積もれば山となるという考えを忘れないようにしよう。小さな積み重ねは、いつか巨大な構築物となる。その逆として、日々の生活の中で、不必要な事柄を積み重ねていかないようにする。例えば、空いた時間に不要な情報検索を行ったりすることである。空いた時間に何かを詰める

のではなく、そこはゆとりの時間とし、時の流れの中にくつろぐように心がける。自分の特性上、私は特にこの点を意識しておく必要があるだろう。

午前中にふと、近い将来、ハイデガーの思想をゆっくりと向き合うことになるかもしれないと思った。午前中に読んでいたアーネスト・ベッカーの書籍の中に、ハイデガーのある指摘が引用されていた。それは、私たちはこの世界に存在していることへの不安(fear of being in the world)と、この世界に存在していることに関する不安(fear about being in the world)の双方を抱くというものだ。この二つの不安が意味していることは、私が想像している以上に深いだろう。前者は幾分生存に関する事柄であって、後者はより実存的な事柄だと言えるかもしれない。これら二つの不安は、より深く理解する必要があると直感的に感じている。前々から述べていたが、本棚に眠っている“Being and Time”を近々ゆっくりと読み進めていこうと思う。フローニンゲン:2019/2/16(土)15:48

No.1688: An Ecstatic Sunny Spot

The outside world is rife with ecstatic sunny spots. I'll go to a supermarket shortly. Groningen, 11:32, Sunday, 2/17/2019

3840. 芸術の社会的な意義

時刻は午後の八時に近づきつつある。早朝に確信を持っていた通り、今日もまた充実した一日であった。実際のところは、早朝にそうした確信を抱いたというよりも、自分が充実感という感覚エネルギーの中に絶えずいることに気づき、その状態のまま一日が流れていくであろうことを実感していたと言った方が正確だろう。

いずれにせよ、今日も自分の人生のある一日が、様々な創造物を伴いながら進行していき、そして確かに今日という一日が終わろうとしている。自分の人生における一日は全て尊いものであり、今日という日が始まったこと、進行したこと、終わりに向かっていくことの全てを絶えず意識していたいと思う。それは明日からも意識し続けていく。自分の人生に絶えず気づいていること。最重要なことはおそらくそれであろう。

先ほど夕食を食べている時に、最後まで人間であること、そして人間であることは何かを最後まで突き詰めていくことを全うしていくことについて改めて考えていた。もう自分にはそれしかないのだと思う。最後まで人間であることをやめず、人間であることはいかなることなのかを最後の最後まで突き詰めていくこと。自分の人生に託されたことはそれであり、それを全うしていくために明日からも生きて行く。

今日は、冬を打ち破ろうとする春が、活力溢れる踊りを踊っていた。そのような雰囲気に満ち溢れていたのが、今日のフローニンゲンである。

春の力強さに改めて驚かされる。その力強さに触発されて、夕方に一曲ほど作った。今日はこれから、教会旋法に関する書籍を再読し、その後、モーツァルトに範を求めて作曲実践を行いたい。

夕食を摂りながら考えていたことの二つ目は、芸術の持つ社会的な意義についてである。自分が日々、日記を書くことや曲を作っていくことの意義について考えていると、それらは共に、何らかの社会的な意義を持っているということが見え始めたのである。それは端的には、新しいリアリティの創出に寄与するということである。日々の創造行為は、新しい製品やサービスを世に送り出すことと同様に、新しいリアリティの創出につながっていることに気づかされたのである。

対象を音楽だけに絞るのではなく、このことは、絵画、小説、詩など、あらゆる芸術領域について当てはまることだろう。芸術、ないしは個人の創造行為は、その芸術表現でしか生み出しようのない新しい世界認識をこの世界に生み出す。そこに芸術の価値があるのではないかとはたと気づかされたのである。

このリアリティは、私たち一人一人の仕事によって、絶えず生まれ変わっている。芸術を通じた創造活動は、他の領域の仕事と同様に、新たなリアリティを生成することに寄与しているのである。

音楽、絵画、小説、詩が開示する固有のリアリティ、ないしはそれらが生み出す固有のリアリティに意識を向けるとき、それらの価値が自ずと見えてくるだろう。それがなければ決して知覚することのできなかったリアリティの創出に向けて、明日もまた自らの創造活動に従事していこうと思う。フローニンゲン：2019/2/16（土）19:57

No.1689: An Affectionate Sunday Afternoon

I feel as if I came to be dissolved in the affection of a Sunday afternoon. Groningen, 15:51, Sunday, 2/17/2019